

## がっしん

佐用町

飢饉ききんのことを佐用郡さようぐんでは、昔むかしから「がっしん」と呼よんでいますが、どんな文字もじを書かくのか、誰だれに聞きいてもわかりませなせん。

いい伝つたえによれば、天明てんめいや天保てんぽうのころには、佐用郡さようぐんでもこのがっしんがたびたびあつたそうです。

ある年としの夏なつなどは、稲いねが育そだつ七十日にちの期間きかんちゆう中にたつつた六日むいかしか晴天せいてんがなく、気き温おんが低ひくく雨あめが降ふり続つづいたので、米こめ作さくはきよくた

んに減へり、金かねはあつても米こめが買かえないので、小判こばんをくわえたまま道みちに倒たおれて死しぬ人ひともあつたといいます。

ある家いえでのことことです。鍋なべの中なかへほんの少すこしのお米こめを入いれて、白湯さゆのようようなお粥かゆを煮にたのを困かこんで食しょくじ事じをしておりおりましたが、中なかの一人ひとりの子こどもは、自じ分ぶんの茶碗ちやわんの中なかへ箸はしを入いれて、しきりに何なんやら探さがしていまます。ふしぎに思おもつた母親ははおやが、

「お前まえ、何なにさがしておおるぞ。」

「茶碗ちやわんの中なかに黒豆くろまめが二ふたつ見みえたので探さがしてみたが、どうにも箸はしにかかららんのぢや。」

「はて、お粥かゆの中なかに黒豆くろまめを入いれたおぼおえはなないが。」

と探<sup>さが</sup>してやりましたが、やはり何<sup>なに</sup>もありません。それもそのはず、黒豆<sup>くろまめ</sup>と見<sup>み</sup>えたのは、子<sup>こ</sup>どもの目玉<sup>めだま</sup>が映<sup>うつ</sup>っておったのでした。

